

境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和3年3月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板

blogから

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。

三月のことば

一切衆生（いっさいしゅじょう）、みな日の没するを見よ。まさに想念を起して正座して西に向かい、あきらかに日を観（かん）ずべし 日想観文

三月はお彼岸の月です。お彼岸の起源は、日想観（にっそうかん）とよばれる修行にあるらしい。どういう行か。お浄土があるという西方（さいほう）をじっとみつめるのです。いつみつめるかというところ、日が沈んでいく、夕方。春と秋の彼岸は真西に陽が沈むからうってつけ。夕陽をみつめるだけですから、難しくはない。だれでもできそうだけれども、「きれいな夕陽だね」と、思ったことはあっても、数分間にわたり、じっと日の沈んでいくのを観察したことは普通はないし、わが禅宗は室内で坐禅をするから、夕陽は見せてくれない。他宗派でさかんに行われている修行かというところからない。でも、京都・清水寺のホームページには、「清水寺境内の入り口近くに建つ西門（重要文化財）は、日想観の聖地です。京都屈指の夕陽の名所でもあるこの場所は、日没時には多くの参詣者が立ち止まり、西の空に沈む夕陽に思いを馳せています」とあります。清水寺からの夕陽、いいだろうな。いつか、挑戦！



写真 千田完治

れるらしい。冒頭に紹介した今月の言葉は、この記事のなかにあつて、法要の終盤に読まれる「日想観文」を転載しました。四天王寺というところ、謡曲「弱法師（よろぼし）」で、彼岸に親子が再会する場所です。それを題材にした、近代の下村観山（1873〜1930）の屏風絵は重要文化財といった具合で、調べてみると日想観は奥が深い。以下は私の珍説になるけれども、戦に無常を感じて出家した熊谷直実（1141〜1207）は、京都から鎌倉へ下向するときに、西に背を向けまいと、馬にさかしまに乗ったという逸話があります。その様子を白隠禅師も画に描いているけれど、これも道中ずつと、日想観して、これも道中ずつと、ひよっとすると、以前にもご紹介した上皇后美智子さまの「三十余年（さんじふよねん）君と過ぎしこの御所に夕焼けの空見ゆる窓あり」の歌も「日想観」ではないかな。いづれにしても、コロナ禍の春。人の密でないところで、マスクを取って夕陽をみつめる、なんていうのが一番のぜいたく？いやいや修行になるかも。ちなみに、令和三年三月二十日、東京地方で日の入りの時刻は、十七時五四分のようです。

見つけた！

不連続シリーズ

街かどに禅を探し、現代に仏教を見つける（住職記）

◇脚本家であり、直木賞作家でもあり、名エッセイストでもあつた向田邦子さんが突然の飛行機事故で亡くなってから四十年経つても、未だに熱心な読者が多いといえます（私もそのひとりですが）。そんな向田さんが書いたテレビドラマに「寺内貫太郎一家」があります。小林亜星が演じる貫太郎が、気にいらぬことがあるとちやぶ台をひっくり返すシーンを覚えてる方もおられるでしょう。今だったら、家庭内暴力で通報されてしまうかも。このちやぶ台、NHKのテレビディレクターである大森洋平さんの著書、『考証要集』（文春文庫）によれば、「ちやぶ台は）明治になって出来る。時代劇では一切NG」とあります。ということは、江戸時代までは、皆かひとところにつどい、お茶をのんだり、食事をするという習慣はなかったのか。つまり、離ればなれに黙って飲食していたのではないだろうか。古くは、清少納言や紫式部などの女房がたは、食事している姿を見られるのを極端に嫌ったという。飲食店で近ごろ、よく見るポスターをまん中にかかげました。平安時代の高貴な女性も黙って、孤独に食事していたと思えば、「黙食」も素直に受け入れられるのでは。◇禅宗には「三黙堂（さんもくどう）」という言葉があります。話しをしてはいけない、声を出してはいけない、三つのお堂とはどこだと思えますか。ひとつは浴室。次にトイレ（東司（とうす））、三つめが、坐禅と食事をする僧堂とよばれる建物です。トイレで会話をする人もあまりいないと思うし、浴室といつても、京都の本山妙心寺には、明智光秀を迫害するために家来が寄進したという蒸し風呂（通称・明智風呂）が

黙食にご協力をお願いします
新型コロナウイルス感染防止のため、当店で黙食を推奨しております。できる限り会話をお控えいただけます。皆様にご安心にご利用いただけるようにご理解ご協力のほどお願いいたします。

残っているけれど、あれを見ると、楽しく会話するような施設ではなさそう。坐禅堂と食堂（じきどう）が無言なのは、これは言つまでもなく、納得。◇さて、「黙」の字を分解すると「黒」と「犬」になります。毎度お世話になっている白川静著『常用字解』（平凡社）は、黒には「墨」の音があり「だまる、しずか」の意味だと、教えてくれます。ならば、「だまる」ことと「犬」の関係はというと、古代中国では、近親者を亡くしたのち、喪に服するにあたって、犬をいけにえにし土に埋め、「三年黙して以て道を思った」のだという。犬には建物や器物を清める力があると、信じられていたようです。死という不可解なものを遠くへ追いやるために、身辺を清浄にして、おのが歩んできた道を静かにふりむいたわけです。◇ここで問題なのが「三年黙して」の三年です。三年といつても、満三年ではなく、あしかけ三年、一五か月だったようです。亡くなって二年しか経っていないのに、三年忌法要というのは古代中国のこの習俗の影響をうけています。なんて、書くと「去年の一月に、叔父さんが亡くなったけど、まだ喪中か」なぞと言わないでください。喪は故人との親疎によって決まるから、三年というのは両親を亡くした時の最長日数です。故人との関係によって、喪の長さが変化するのはい前にも書きました。ともかく、「男は黙って！」なぞと書くことジェンダー・ギャップ（男女間の格差）だと叱られるから、「みんな黙って、食事しましょう」（住職記）